34 足立長雋の訳書『産科礎』の成立年代

石原　力

『（遠西）産科礎』は、足立長雋（一七七六―一八三七）が入手して天の賜と喜び、西洋産科を志す機縁となった「和蘭産科書」の訳書と思われるが、その翻訳の時期については不明である。一九六九年日本医史学会で酒井シヅ氏は、本書の内容、原著者、原著、その蘭訳本が京都大学図書館にあることを発表されたが、本書成立の時期についての言及はなかった。

本書の原著は Jean Louis Baudelocque（一七四六―一八一〇）の〈Principes sur l'art des accouchemens par demandes et réponses, en faveur des sage-femmes de la campagne.〉（田舎の助産婦のための問と答による産科学の基礎知識）で、初版が一七七五年、原著者の死後まで五版を重ねている。一七七九年 C. S. によるオランダ語訳本〈Grondbeginsels der verloskunde, ten nutte der vroedvrouwen ten platten lande in vragen en antwoorden opgesteld.〉（問と答で書かれた田舎の助産婦のための産科学の基礎）が出版され、二版は一八〇八年に出て、これが『産科礎』の原本であることは長雋の年齢から明らかである。C. S. を一九九三年の〈Nederlandse Bibliografie〉は Cornelius Schutters（一七六七―一八四八）としているが年齢的に疑問があり、Baudelocque の弟子で師の本を蘭訳した A. Soek の家の者の可能性も考えられる。

「濃国江馬氏蔵書印」のある二版の京大本が長雋所蔵原本なのかは興味のある所である。長雋から江馬春齢宛書簡もあり無稽ではないが、京大本にその形跡はなく、長雋所蔵原本は文政一二、天保五年の江戸大火罹災で焼失したとみるのが妥当であろう。

『産科礎』は右オランダ書からの重訳であるから、その舶来は翌一八〇九年以降であろう。当時三四歳の初学者と思われる長雋が翻訳に難渋したことは、四か所三三行に及ぶ翻訳放棄、原文記載にもみられるから、書物の入

手・翻訳期間に一年以上を要したであろう。従って本書の成立が一八一〇（文化七）年以前ということはないと考えられる。

さて、長雋の訳著書、校訂本で現存するものは十五部あるが、これらに書かれている肩書きは①日本江戸、②篠山医員、③篠山侍医の三種があり、この順序で経過したと考えられる。たまたま文化一一年には、一月に丹波「篠山医員」足立長雋松父の『製造ニ撒児亜尓謨尼亜矢即硇砂ヲ』と、一〇月に「篠山侍医」足立長雋校訂『泰西熱病論』があり、長雋は文化一一年一月から一〇月までの間に医員から青山忠裕藩主の侍医に昇進したことが判明した。

一方、『産科礎』は巻之一及び巻之二から成る上巻相当部分（原本第一篇から第三篇八章まで）と、下巻相当部分の巻二（原本第七篇のみ）とから構成されており、その肩書きは前者で「日本江戸」後者では「篠山侍医」となっているから、上巻相当部分は文化一一年以前の篠山藩医仕官前、下巻相当部分は文化一一年以後の訳である。長雋仕官の時期が師の吉田長淑の加賀藩医仕官の文化七年よりも後、文化九年頃とすれば、『産科礎』上巻相当部分の成立は、それより前の文化八（一八一一）年前後と推定される。

下巻相当部分については、これと『遠西記聞』、別名『精慮先生医譚聞書』とを合本にして『産科摘要』を出した精慮堂門人の小室元貞がその末尾に、「予徂年足立先生ヲ訪ヒ案上ニ於テ此稿本ヲ得帰テ其一二傍訓ノ誤ヲ校ス」と記しているので、元貞が精慮堂を辞して家業を継いだ文政一〇年から、火事で原本を失った可能性の強い文政一二年までの間、文政一一（一八二八）年前後に成立したものと推定される。下巻相当部分には蘭文記載などはなく、訳文もやや洗練されたようである。

『産科礎』の上巻相当部分が文化八（一八一一）年に成ったとすれば、これまで「我邦ニ於ケル西洋産科書ノ嚆矢」は文政六（一八二三）年と仮定されている青地林宗訳『訶倫産科書』とする説（中野操）は訂正されねばならない。

（賛育会清風園診療所）